

令和7年度第1回函館市政策アドバイザー意見交換会会議録【Bグループ】

1 日時 令和7年(2025年)11月14日(金)15:30~17:30

2 場所 花びしホテル2階「あかしや」

(陳内フェロー)

皆様こんにちは。都市ブランドと観光について70分間で限られた時間ではあるんですけど、アドバイザーの皆様3人、それから函館市の部長の皆様、ISARIBI with様も今日いらっしゃいまして、有意義な意見交換を通して函館市の政策、未来のために議論が出来たらと思います。私は函館市フェローの陳内と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

早速、進め方なんですけど、まずは、函館市サイドからどんなことを今お考えなのかということをお話をいただいてもよろしいでしょうか。その後に政策アドバイザーのお三方から8分程度でご意見を頂戴する。あとISARIBI with様からも5分程度コメントをいただくということを最初、回らせていただいて、スムーズにいけばお時間が20分程度余るのではないかと思います。その中で相互に意見交換ということを引き出せていけたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。観光部長さんからよろしくお願ひします。

(扇谷観光部長)

函館市観光部長の扇谷と申します。よろしくお願いいたします。皆さんの方にA4横の資料で最初に1ページ目に一覧がついておりまして、そのうち私の方からは観光というジャンルの4つの分野に関しまして、ご説明させていただきたいと思ひます。

まず、1枚おめくりいただきまして、グループ協議用資料ということでご用意させていただいております。まず、キーワードの一つ目、観光に関しまして取組内容でございますが、まず一点目、函館山夜景魅力度向上事業ということで、これは令和6年度から開始しております。実は、函館山の山頂は昨年度からいわゆるオーバーツーリズムで、人気観光地の宿命ということで混雑が非常に激しいという認識であります。こういった部分で1箇所に固まらずできるだけ回遊していただく、そういったような取組みを山頂エリアでしていこうということでございまして、山頂エリアのいわゆる夜景を見るビュースポット以外の場所にライトアップなどを設けたりして、分散化を図る、こういった取組みを行うことと合わせまして、将来的に山頂展望台の拡充整備も視野に入れながら、それに向けた整備の基礎調査、ボーリングを含めた地質調査を今年度開始させていただいているところでございます。

また、次のオーバーツーリズム対策事業ということで、先ほど申しました函館山山頂は大変混雑する、ロープウェイで上り下りする方が非常に多いのでございますが、長い時で1時間待ちですとか。昨年度で一番酷かったのが80分待ちというのがございました。夜景が一番きれいに見える時間帯などに集中する傾向もございまして、また昨今ですと、スマホの高性能化によってカメラで夜景が非常に簡単に撮れてしまう

というのがございまして、タイムラプスなどで長時間滞在して、ずっと撮っている方も結構多いということで、従来と混雑の仕方が変わってきているということを受け止めてございまして。そういった中では、我々としては夜景の眺望する場所を、先ほどのお話のような分散化で仕掛けをしているんですけども、時間帯の分散化を含めまして、まずは混雑状況の配信システムを本年1月に導入させていただきまして、間もなく1年経ちます。1年経ちますと、今度その蓄積されたデータからAIでの混雑予測を年明け以降に改めて配信することができるようになるということでございまして、今年度はそれらの拡張システムの取り組みなども行っているほか、事業者であるロープウェイさんにもご協力いただきながら、待ち時間そういったものを表示するといったものの整備を行っていきます。

併せまして、函館山の山頂だけではなくて、八幡坂という、函館の映画ですとか、CM、ドラマ、そういったものでよく使われる非常に有名な坂があるんですけど、車道に出て写真を撮られたり、特にインバウンドの多い春節時期になりまして、非常にその車道部分にカメラを担いだ方々がいて危ないということがございまして、そういった方々に対する対応というのも今年から始めております。

次のページをおめくりください。次のキーワードでございまして、湯の川温泉の再興ということでございまして、北海道三大温泉郷として、もともと古くから観光温泉地として賑わっておりましたが、近年、団体から個人へのシフトで湯の川温泉自体が宿泊客を含めて伸び悩んでいるという状況にございまして。こういったことから今年度からスタートさせまして、リブランディングということで、まずは湯の川の魅力を再発信させていただくということで、今年度は若い方々に人気のあるショート動画の配信を含めながら、まずは手をつけていって、今後さらに拡充してまいりたいと考えております。

最後になりますが、グレーター函館の推進ということでございまして、こちらは広域観光連携、道南エリアを中心に動いているということで、いくつかの事業体で動いている部分がございます。この他に先ほどの冒頭の市長からの挨拶でもありましたように、道南エリア全体で1,000万人泊、これを目指すということを踏まえまして、さらなる道南との連携強化、集客の強化のために、周辺18の市町あるんですけど、やる気のある地域同士が手を組んで誘客に努めていく、そういったような仕掛けを今年度から導入させていただいております。簡単ではございますが時間もありますので以上とさせていただきます。

(陳内フェロー)

はい、ありがとうございます。土木部さん、お願いします。

(春山土木部長)

函館市土木部長の春山です。私、初めてになりますけども、今後ともご指導のほうよろしくお願ひしたいと思ひます。観光部とつながっているんですけども、土木部の取り組み状況をご説明させていただきます。お手元の資料8ページをご覧いただき

と思います。同じく湯の川温泉の再興策の1つとしまして、観光部とともに、令和2年度から湯の川地区活性化推進事業に取り組んできております。この事業につきましては、観光部の施策と同様で、長い歴史を持つ温泉街である湯の川地区が以前のような賑わいとなることを目的にしまして、観光地としての顔、それから住宅地としての側面両面が共存する、この地域の特性を生かしたまちづくりを、町内会それから商店街、温泉組合など地元の皆さんの意見や協力を得ながら進めてきております。

主な整備内容としまして、この資料の方にありますが、基本的にはすべての道路の整備になるんですけれども、写真右下の方に代表的な写真をつけておりまして、この花びしホテルさんの前も見ていただけたとは思いますがけれども、歩道に明るい色彩のブロック舗装を設置しまして、幅も元々4.5メートル程度であった温泉通りの方を6メートルまで広げることによって、今後、露店だとかキッチンカーなどの設置ができるように幅を広げております。イベントなどの開催も可能としております。広げたスペースで休憩施設としてベンチや湯の川温泉の過去の歴史を知ることができる説明板なども置いております。

続きまして、右上の写真になります。道路にはもともと松や枝垂れ柳などといった街路樹が植えられておりました。和の木といえは和なんですけれども、大変大きくなりすぎて、まして柳がうっそうとなったことから、これらに代えて新たに道路整備の際に桜を植えております。樹種については、今、街路樹としては、ジンダイアケボノという樹種で植えております。これが小さい木で植えてますけれども、将来成長した際には美しい桜並木となって、新たな桜スポットになることを期待しております。

次に、左下の写真となりますが、温泉街らしいデザイン照明灯、これは夜の写真ですけれども、デザイン照明灯を設置して、ちょっと写真があんまりわかりにくいんですけども、昼だけでなく夜も街歩きが楽しめるような、歩きたくなる道路へ改修しております。それと、今、照明灯にもタイトルついてるんですけれども、湯の川冬の灯りという観光部でやっているイルミネーションとライトアップでイベント開催する予定の道路になっております。

続きまして、左上の写真になります。これが花びしホテルさんの真向かいで、もともと設置しておりました足湯を設置しているポケットパークがもともと古いものだったものですから、段差を少なくして、それからここも同じく、樹木が生い茂って、うっそうとしたものですから、開放感のある誰でも立ち寄りやすい施設へと道路と一緒に改修しております。

最後に、中央の写真になりますけれども、湯の川地区にある熱帯植物園で飼育する猿が温泉につかる様子がインバウンドなど観光客に人気となっていることから、温泉街の玄関口となるこのポケットパーク、湯の川温泉電停がすぐなんですけれども、ここが玄関口として、この写真を用いたシンボル看板として大きく設置しました。

以上、道路整備の事業の主な中身でしたが、これらの整備にあたりましては国土交通省のまちなかウォークアブル推進事業、歩きたくなるような道づくりというものを利用して、交付金を活用し進めているところでありまして、令和11年度までの予定となっております。

今年度におきましても、歩道のブロック舗装やデザイン照明等の設置などを実施し、来年度以降はこれまで進めてきたこのハード整備を最大限に出せるように、周辺へ歩行者用案内板を設置するなど、ポケットパークなどの観光スポットや商店街へ歩行者を誘導するほか、道路を活用した新たなイベント等の創出に向けて社会実験を行っていくなど、人が集まり、賑わいにつながるような政策を今後も進めていく予定となっております。説明は以上になります。

(陳内フェロー)

はい、ありがとうございます。続いて、都市建設部さんお願いいたします。

(山内都市建設部長)

都市建設部部長の山内と言います。よろしくお願いいたします。私の部局では街の魅力、それから地域ブランドの向上を目的に、西部地区の歴史的建造物を活かしたまちづくりということをコンセプトに各種事業に取り組んでいるところであります。

資料のこれまでの経過として①から⑤でありますし、⑥については今後やっていきたいこと、今後に期待していることで記載されております。

資料のその②の歴史的な町並み、景観の保存ということで、昭和 63 年に条例を制定しております。それに合わせて所有者に対して外観保全、支援制度の創設をしております。

③としまして、人口減少、それから空き家・空き地の増加ということで、これは郊外の開発が進んでいるということもありまして、地域の人口が減少し、空き家・空き地が増加しているということで、歴史的建造物の空き家化も進んできておりました。

④は、これまでの取り組みでは、結局なかなか解決しないということでございましたので、市としまして西部地区再整備事業基本方針を策定し、力を入れようということで策定しております。共創によるコミュニティの形成、歴史的建造物の活用、こういったことに力を入れていこうということで、その中では一番下にありますけれども、居住と観光が融合した持続可能なまちづくりを進めていく必要があるだろうということで、今までは保全をメインにやってたんですけれども、ただ保全というものだけではなく、建物を利活用して初めてその地区が活性化していくんじゃないかということで、当市の中ではそういうものも活かしていきたい・活かしていこうと取り組んでおります。また、建物だけを活かすということではなくて、それもやはり共創による取り組みということでソフト的な施策も実施しておりますし、地域の方々、事業者も巻き込んで取り組んでいこうと進めております。

⑤としまして、今までの体制もいいんですけれども、やはり体制をもっと整備していこうということでまちづくり会社を令和 3 年に設立しています。函館市として出資しながら地域の方からの出資をいただいて会社を立ち上げて、地区の魅力発信、関係人口増加のための地域の方々を巻き込んだイベントを採用しております。それから会社自ら建物のリノベーションをしまして、企業誘致にも実践をしているところであります。

ここまでは令和6年度までの取り組みになりますけれども、⑥として民間事業者の関与を促進ということで、会社はその令和3年から4年間が経過しておりまして、これまで市、それからまちづくり会社が事業主体となって、いろいろな取り組みをしているんですけれども、やはりそれだけでは長く続かないということですので、徐々に民間主導の事業も多くしていきたいということで、これまでその種をまいてきまして、若干、だいたひ地域の意識も変わってきたところでありまして、少しずつ事業も民間主体の事業にもつながっていていますし、これからもっと増やしていければいいなと思っています。

関係人口ですとか歴史的建造物の利活用もなかなか一気に進まないんですけど、こういったことは地道にやっていって、まちを活性化させていきたいということでございます。以上です。

(陳内フェロー)

はい、ありがとうございます。では、企画部さん、お願いします。

(山口企画部次長)

企画部次長をしております山口と申します。よろしくお願ひいたします。

企画部からは移住と関係人口について説明いたします。10ページをご覧ください。移住につきましては令和5年から設置いたしました函館市人口減少対策本部におきまして、移住・定住の促進を3つの重点方針の1つに掲げているところでございます。移住につきましては現在力を入れておりまして、主な取り組みといたしましては、移住検討者の相談対応ですとか、情報発信をしていただくため、先輩移住者を4名、移住サポーターとして委嘱をいたしました。そのほか、函館での実際の生活を体験できるお試し移住を実施しております。あとは全国的な制度であり、都道府県で割り振られる予算の範囲内にはなるんですけれども、東京圏の方から函館に移住しまして、一定の要件を満たした場合に支給されます移住支援金を交付しております。都市地域に住む方が地域協力活動に従事するために移住して、その地域への定住・定着を図る地域おこし協力隊制度も活用しているところです。また、西部地区の函館山のほうに昔の百貨店を改修して活用している建物がございまして、そちらが地域交流まちづくりセンターでございます。そちらに移住検討から移住後までのワンストップ窓口として移住サポートセンターを設置しまして、移住者と地域住民が集う移住者サロン、まちセン茶論というのですが、それを月1回程度開催しております。

次に関係人口になります。移住した定住人口でもなく、観光に来た交流人口でもないという関係人口でございますけれども、こちらは地域と多様に関わる人々を指しているものでございまして、今でも函館マラソンですとか、函館競馬などといったイベントに毎年かなりいらっしゃっている方もいると思うんですけれども、把握はしておりませんが、かなり地域の方々との交流もあるのではないかと考えております。資料の方でございますけれども、これまでの取り組み例ということで、いろんなジャンルのものを列挙しております。スポーツイベントやMICE、これはMeeting, Incentive travel,

Convention, Exhibition, こちらの頭文字をとったものですが、会場は何年も前に決まるために、地道に PR 活動をしてきたところです。あと大都市にはちょっとかないませんが、函館はとてもコンパクトな街で空港からも近いですし、本州からはフェリーもあります。新幹線で来れることもできますし、この花びしホテルから近くにあり、函館アリーナ、市民会館等のコンベンション施設、野球場、サッカー、ラグビー場などもございます。修学旅行の誘致なども精力的に行っているところでございます。

これまで取り組んできたものを、この関係人口については、なかなかこう統一した視点では捉えては来ていなかったと思います。今後は函館市人口減少対策本部のもとで政策を再整理しまして進化させていきたいと考えております。簡単ですが以上になります。

(陳内フェロー)

ありがとうございます。それでは、各部局長からお話しありました。大泉市長が最初にこの部会に来ていただいたんでお願いします。

(大泉市長)

今、関係部長から色々説明をいたしました。観光あり、都市ブランドありということです。この都市ブランドなんですけど、非常に函館にとって重要なものです。というのは、例えばラピダスがあるわけでもありませんし、人口をぐっと引きつけるようなもの強烈なものを持っているわけじゃないんですが、函館はこの都市ブランド、これを突破口にできる、非常にそこがうちの有利さであります。実は、地域ブランド総研というところが、もうずっと前から調査をしていて、うちは何度も日本一に輝いています。ただ、なかなか都市ブランド日本一になっても別に人口減少を止められるわけじゃないんです。毎年4,000人減り続けているんです。ただ、せっかく持っているこの都市ブランドを、日本国内1位じゃダメなんだということはもう証明されたと思うんです。ですから、これをなんとか世界の認知度を高めて、世界ブランドにできないものかということであがいているというところでもあります。ただ、相当いいものを持ってますから、大いにチャンスがあると思っています。

一つ例を挙げると、今、政府も二地域居住というのを始めています。私たちが二地域居住について取り組みを始めたところではありますが、いろいろ喋る時によく言うんです、東京の方に。二地域居住、函館一択じゃないですか。ちょっと言い過ぎかもしれませんが、そういう話をしています。というのは、まず3つ言うんですよね。涼しいです、梅雨がないです、花粉症ほとんどないですという。これだけでも、かなり東京の方、食いついてくれるんですが、それに加えて、先ほど企画部からもあったように空港から非常に近いです。福岡とかと同じぐらいの距離ですよ。これに加えて、元々みんなから話があったように食があったり、温泉があったり、あげくには世界遺産までうちには付いてきます。ですから都市景観とかいろんなことを申し上げたように、非常に世界ブランドになりうるものを持っているので、これをどんどん

んどん掘り起こし、また新しいブランドを作って、世界と戦えるといいますか、函館からでも世界に挑戦できる、そういう街にしていきたいと思っていますところでありませぬ。

時間の関係ですみません。ここで退席をいたしますが、ぜひ忌憚のないアドバイスを、ご意見を頂戴できればと思いますので、よろしくお願いいたします。

(陳内フェロー)

はい、大泉さんありがとうございます。今、函館市の各部局と大泉市長からの熱いご計画とお話がありました。政策アドバイザーのお三方ですね。丸谷さん、野村さん、大西さんの順番で、もしよろしければ8分程度で、丸谷さんからご提案を、お考えをいただけたら嬉しく思います。丸谷さんどうぞよろしくお願い致します。

(丸谷智保氏)

セコマの丸谷です。どうぞよろしくお願い致します。ご存じの函館ベイのお店がお陰様でできまして、今道内でも3本指に入る売り上げです。とりわけハセガワストアの焼き鳥弁当の売り上げがすごいですね。ホットシェフどころじゃないんですけども。来店客を見ますと、7割がいわゆる会員ではない人。ざっくり言えば地元の人3割の観光客が7割というような比率になってます。一方、音威子府っていう600人の村があるんですけど、ここのお店は地元の方で会員7割、それ以外の人3割、全くこう真逆なんですけども。要はその土地だけの人で回ってる店と、それから外から来た人たちがそれ以上の大きな売り上げを作ってくれるという、ちょうど極端になっていて面白い現象なんです。こういうお店が私はあってもいいと思うんです。本来は会員がたくさんいて、地元の人がしっかり毎日使ってくれるというのが我々の店舗の特徴なんですけども、函館はちょっと毛色が変わってまして、いろんな観光客が北海道のお土産をここでまとめて買うとか、あるいはキャラクターグッズをたくさん買うとか、異質な売り上げが立っているのは、逆にこれはいいことだなと思っていて、狙いどおりになっています。つまり、いつも言っているとおり、定住の人口をメインに我々お店出していますけれども、そうじゃなくて流動する人口の人たちが多くてお店が成り立つということは非常に大きな経済効果が出ると思っています。

例えば、前の会議でも言ったんですけど、たばこ税ですね。皆さん方が多分一番心配されるのが固定資産税の減少で、どうやってその公的サービスを維持できるんだろうと。それが一番人口減少の怖さだと思うんです。ところが、函館が持っている力が、いわゆる関係人口というのか観光客と言ってもいいのかもしれないんですけども、それを引っ張る力が非常に大きいと。たばこ税だけでですね、地方税比率非常に高い。消費税の分も含めると25%ぐらい地方に落ちるんです。ざくっと計算すると、おそらく3億円ぐらいがセイコーマートのたばこの売り上げで、地方税として落ちていきます、函館市に。ですから効果としてこれだけあるんです。もちろん消費税の地方税分もわずかですけども落ちますので、これ全体で観光を伸ばしていくとですね、その分が様々な皆さんがやっている事業の原資に新しくなっていくし、プラスオンされる

ということは十分ご認識をいただいたのではないかと思います。

若干アドバイスなんですけれども、先日、今治市に行ったんです。知事と話す機会があったんですけども、愛媛県知事は、「愛知県知事の中村です」なんて冗談みたいに言って、つまりそのくらい愛知と愛媛でよく間違われるという、あんまり県として認識のないところで、どうしようかと考えたらしいんですけども、しまなみ海道があって、そのしまなみ海道は一本だけですね、自転車の道、これがつながっている島のための、住民のための自転車道をしかたなく整備しただけでボロボロだったんですね。で、いろいろ探してもなかなか見当たらずで、このしまなみ海道一本でいったんですよ。そのためには徹底してやらなきゃいけない。まさにさっき市長からもお話しあったように、世界一の自転車道を作ろうと。つまり、まあ景色景観も素晴らしいし、松山に行けば道後温泉もあるし、相応に観光資源はあるんですけども、やっぱりそこで何をやるかっていう、いわゆる今風の何かやることを創設したかった、ということが一つありまして、そこから広がりを持とうと。ただ、いろいろ探しても、このしまなみ海道ぐらいしか見つからなかったの、このしまなみ海道一本作戦で、かつ自転車道路の一本作戦で、これは県の事業ですけども整備したんですね。そこをいろんな自転車、サイクリングツーリズム好きな人ですね、そういう人たちが世界から集まってくる。そういう道に整備したと。さらにですね、自転車業界って一番の会社がこのジャイアントという台湾の台中にある会社ですね。ここに行って、台中にあるジャイアントって会社のお店を、東京の銀座ぐらいしかなかったものを、誘致してですね、そうするとジャイアントはそのサイクリヤーがみんな知っている1台100万円も200万円もするような自転車を販売しているところなんで、そこがお店を作ったんですね。全世界にそのしまなみ海道の素晴らしさを発信してくれる。それによって、今のサイクリングの聖地になっているようなものが生まれたんですけども。たぶんそこからいろんなものがこう発展していくんです。

ちょっと今お話聞いていると函館ってね、いろいろブランドのものがいっぱいありすぎて、どれをやっていいのかと。函館山がある、湯の川がある、五稜郭がある、歴史的建造物がある。それから歴史そのものもあるとかね。僕は、世界一なのは何かっていうのをまず絞り込んで、そこにフォーカスを当てるとのことと、それをそのものじゃなくて観光客の流れに動きとか、そういうものに繋がるようなことが出来ないかなと。そういう考えで、今一度こう絞り込んでみたらどうかなと思います。

広島に行くと、お好み焼きのスタジアムがあるんですけども、広島も何もないもんだから、そんなのがずいぶん観光客を呼ぶんですね。何かをやったりその中で、ブランド都市の中でさせるっていうようなことを、それがすごく重要じゃないかなというふうに思います。

お話があった中では、やっぱり歴史の箱物とそれを結ぶコンテンツの融合がもうちょっと必要なかなということと、そのせっかくある箱物を案内するようなガイドさんにもっとお金を使う、それから育てていくとか、そういうことが非常に大事なことになるかなって。この都市を回るということが大事。それから、あと食についてのお金の使い方がもっと必要なんじゃないかなと。例えばイカソーメン作り体験をさせるみ

たいなね。そういう食を観光とつなげたようなことにお金を割いていくという発想が必要なんじゃないかなというふうに、今、発表を聞いていて思いました。以上です。

(陳内フェロー)

丸谷さん、ありがとうございます。多岐にわたるご提言いただきました。ありがとうございます。では、野村さん続きまして8分程度でお話しをいただけますか。よろしく願いいたします。

(野村修也氏)

中央大学法科大学院教授をしております野村です。大変多岐にわたる試みをされていることを、なかなか今まで伺う機会がなかったんですけども、今日お話を伺いまして一生懸命皆さん方やっておられるというのを知りました。ぜひ引き続き頑張っていたきたいなというふうに思った次第です。そういう中で、私の知恵がそれほどありませんけれども、少しお役に立つことがあればということで、いくつかお話しさせていただきたいと思えます。

まず、函館の夜景の話なんですけれども、今やっておられることはすべて、ぜひ進めていただきたいと思うんですが、この会議でも前にもちょっとお話ししたんですが、私が大学で教え始めた頃、夜景の日というのができまして、これは今でも一応コンセプトとしては残っているんですけども、運動としてはだいぶ下火になっているんじゃないかなという感じがあります。最初できた時は、とにかく函館の夜景が少し寂しくなってきたのでみんなで盛り上げようという住民の運動だったような気がするんですよ。それは、例えば、自分の庭先で車のエンジンをかけて、ライトをつけて函館の輝かしい夜景をもう一度みんなで作り出そうというような試みがあったと思うんです。そういう意味では、この今やっておられることに加えて、市民参加型の函館夜景盛り上げというのを考えてもいいかなと思っています。綺麗な夜景を見せるというだけではなくて、例えば、花電車というのがありますね。花電車が走っているのは7月25日から8月5日なんですけれども、なぜ8月13日に走らないのかということも、考えてみれば不思議と言えば不思議です。もし、夜景の日があるのであれば、その日に函館が本当に輝かしく光っているのをみんなで作ることができるはずなので、1週間延ばしていただくとか、あるいは、ずらしていただくだけでも雰囲気はだいぶ変わるかなと。夜景の日に花電車走っているよねというのは、みんなの心に止まる可能性がある。確かに、港まつりとリンクしてることは大事なんですけども、その期間以外にたった一日でもいいですから8月13日に花電車走らせてみるのも悪くはないかなという感じもします。

それから、例えば、私が子供の頃は東高校って言っていましたが、今は市立函館高校でしょうか。行灯行列をやっていると思うんですけども、ああいうようなことも別々にやっていますけども、じゃあ8月13日に昔ながらの行灯行列みんなでやっ

てみて、市民参加型ですね、行灯は基本的には光を発するものですから、みんなで担いで、やりたい人達、若者が参加して行灯を作ると。そうなってくると、もしこういうのはどういうふうに火がつくかわからないんですけども、よさこいみたいな感じで色んな函館出身者の人たちが戻ってきて行灯を作って担ごうよというイベントにすることも出来なくはないので、ちょっとした工夫で今やっている事柄を総力戦に変えていくことが1つあるんじゃないかと思った次第です。

それから湯の川なんですけども、湯の川は非常に良い温泉で、やっぱり入ればすぐ良くなってはよく分かるんですけども、なかなか伝わっていないような気がするんです。温泉には由来がやっぱりありまして、これは元々傷を癒やすということで見つけられたというコンセプトがありますので、前にもここでお話をしたんですけども、湯治という昔から怪我をしたりとか、腰を痛めたりとか、そういったような人たちに長い期間ここを利用してもらって関係人口になってもらうのは、1つのアイデアとしてはあると思います。それを少し敷衍（ふえん）して考えますと、スポーツ選手の中にはやはり長期間怪我で困っている人たちが居るわけですけども、それを例えば、治療施設と温泉が融合しているようなものが存在していれば、大きな1つの拠点になり得るということはあると思います。

温泉の復活に関して言いますと、皆さん、熱海に行かれたことあるかと思うんですけども、熱海は15年ぐらい前は誰も行かなくなってしまった温泉街で、基本、熱海はどちらかという社員旅行みたいな感じの大規模な施設で、昔は流行っていたんですけど、あんまり人が来なくなってしまったという、そういう場所でした。けれども、今行ったら若い人たちが殺到しているわけです。普通に私どもの大学の学生たちが、週末どこに行くって、熱海行こうかって、こういうふうな雰囲気になっているわけですね。これは作ることが出来るわけなので、ここはぜひやっていただきたいなと思っています。別府もそうなんですけども、別府は湯布院というのがあるんですけど、逆に大型施設を利用して、韓国の人たち、結構団体旅行まだあるんですね、企業の。ですから誘致をして、団体旅行で来てもらうのは、結構人気は別府の方は復活しています。熱海はどうなっているかという、復興させた出発点というのがありまして、これはもうこれは有名な話なんですけども、まず、地元の人に熱海の温泉に入ってもらうとか、熱海を歩いてもらうというイベントを徹底的にやったんですよね。よく考えてみますと、私も子供の頃から函館に住んでましたけど、湯の川温泉はもしかするとそんなに行った機会なかったんじゃないかと思うんですよ。つまり、地元の人が利用してないところにお客さんが来るわけがないので、ある意味では地元の人がここ良いよねという口コミをまず地元から発するようなものをやらなければいけないと思います。そういう点での基本的な成功事例を分析していただいて、せっかくですから利用していただければと思います。

あと一点なんですけれども、先ほどスポーツの話を申し上げたんですが、これも前にもお話をしたんですけども、ソニーとかキーエンスあるいはNTT データとか、アシックス、ミズノといったようなところが、データセンターを作ってスポーツ選手のデータを取るということを一生懸命やっているんです。これはものすごい大きなビッグビジネスになるんです。そこの拠点というのを実は探していて、できれば大きい施設なので土地が少し安いところがいいので、都会よりは郊外という、そういう発想があります。函館は先ほどありましたように空港が近いですから、非常に便利です。さらに温泉もありますから、怪我をした人がそこに行けるという、そういうスポーツ関連宿泊施設みたいなものとビッグデータを取るような場所、さらには、個人データを取って、それによってトレーナーが今節丁寧に指導してくれるような、そう大谷選手が通っているような施設ですね。ああいったようなものを、今、日本のどこかに作ろうとしている動きがあるので、そこをむしろ日本の先駆けとなって拠点にすれば、そこにいろんなものがあるかなと。先週、私は熊本行きでしたが、TSMC がありまして、それ来ただけでもう周りはものすごいマンションが建ってますし、どんどんスーパーもできるしという波及効果がものすごく大きいので、何か大きなビジネスになるものの拠点を1つ置くことによって、起爆剤になるかなと思いますので、ぜひ検討してみてくださいと思います。

(陳内フェロー)

野村さんありがとうございます。では、大西さん。お願いします。

(大西雅之氏)

鶴雅という旅館を経営しております大西と申します。去年の6月まで日本旅館協会という全国の旅館団体の会長をしておりました。そういう観点から質問も含めて言わせていただけたらと思うんですけども、我々の業界でやっぱり今一番大変なのは人手不足なのですが、函館の状況はどうでしょうか。

(扇谷観光部長)

函館の宿泊事業者さんの従業員、スタッフの状況なんですけども、去年の夏ぐらい、6月・7月くらいまでは、やはりスタッフが確保できずに、7割程度しか提供できないというのが続いていたとお聞きしております、コロナ明けからですね。ただ、それ以降、去年の夏以降ですね。いいか悪いかは別としまして、いわゆるスキマバイトの活用もかなり各宿泊施設さんで進んでおりまして、そういった意味では一定程度、今は、ほぼほぼ市内の宿泊事業者の方では、フル稼働できるようなスタッフ体制に、スキマバイトも含めてですけどなっています。ただ、料理人などについては相変わらず不足が続いている状況になってます。

(大西雅之氏)

先ほどの市長さんのお話で、毎年4,000人、人口が減っているというお話があって、僕が思っていた以上にすごいなと思っているんですけど、私は本拠地が釧路市なんですけど、釧路市もものすごい数が減ってまして。それで30年後に6万3,000人の人口になるという統計が出ているんですけど、函館では20、30年後に人口がどのぐらいになってしまうんでしょうか？

(山口企画部次長)

まず、社人研では2050年に15万人程度、2070年には9万6千人です。人口ビジョンで示したものと低位・中位・高位とあるんですけども、だいたい中位で15万人程度、2050年に。ただ、年少人口はかなり減るような形にはなっています。

(大西雅之氏)

これだけ魅力的な街で、先ほどのお話にもあるように、私も調べたら、去年、全国市区町村魅力度ランキング1位、何年も続いているようなそういう函館でどうしてこういう状況になるのかということの一つ思っております。

ちょっと話変わるんですけども、インバウンド今まで弱かったんですけども、今年かなり良くなっていますよね。全体宿泊者の中でインバウンドの比率はどのぐらいなんでしょうか。

(扇谷観光部長)

今年度の上期はまだ数字を拾っている最中なので出ていないのですが、令和6年度で申し上げますと、延べ宿泊が函館市内470万ぐらいあるうちに、70万人が外国人延べ宿泊となっております。

(大西雅之氏)

12,3パーセント？

(扇谷観光部長)

そうですね。15パーセントまでいかないくらいですね。

(大西雅之氏)

函館の知名度からいって、やはり少ないですよ。2割は平均でいってなければならぬだろうと思うんです。この辺がどういう原因なのかなということもあろうかなと思っています。グレーター函館のことを、ちょっとお話ししなければいけないと思っているのですが、どうしても函館市の魅力も、先ほども企画部の方からお話があった函館はコンパクトな街という形なんですけども、リピーターはコンパクトすぎると、逆に何度も楽しめないというか、札幌はすごく集客力はあるんですけども、札幌の魅力だけで10回超えるかという、これはやっぱり厳しいわけで、その周囲、もちろ

んオール北海道の連携で札幌は人気を保っているんだらうと思いますけど、私は函館っていうのも非常に魅力的な都市ですけども、その函館市の魅力をグレーター函館、周辺の町も含めてこれは捉えるべきだなと思っております。我々北海道の人間からすると、山村とか、そういうのは、ただ寂しいだけみたいになるんですけど、本州の方にとってみると、そういう穏やかな漁村の風景とか、里山の牧草地とか、こういうものがすごい魅力的なわけで。こういうところまでもっと広く捉えていって観光ルートを作っていく。

実は、この間も市長さんにもお話したんですけど、今、アドベンチャートラベルの世界大会をもう一回北海道に呼んでこようという話になっていて、ATTA という最大組織があるんですけども、そこのトップも北海道にもう一回やりたいと言ってくれているんですね。今回、道にそういうメッセージレターをもらってきているんですね。この間、世界大会終わったばかりで。国は、もう一回、北海道となると困るなど言っているんです。沖縄も九州も長野県もすごい頑張っているの、2回続けては困ると言ったら、そしたら ATTA から出てきたアイデアは、東北と北海道を組んだらどうかと。東北は震災復興 ATWS, そして北海道に持ってきて、異文化交流が結構大きなテーマですので、縄文からアイヌというテーマもあるし、その時にこのグレーター函館、南北海道ブランド、これをもっと強力に推進しなければいけないなと思っています。

私はそういう意味で1つだけ言いたいのは、函館山のことも、過去2回で話してきました。オーバーツーリズムのことも話してきましたけれども、それに山岳電車を作ったらいいとか、いろんな提案もしましたけれども、そういうこともあるんですけど、僕はもう1つ、大きな核を作るほうがいいと思う。それは五稜郭かもしれないし、湯の川かもしれないけれども、そこに大きな塊を作ることによって、函館の魅力が増えますし、オーバーツーリズムも解消できると思うんです。

一例であげると、札幌の郊外に支笏湖で氷濤まつりってやっているんですけど、あれはわずか20日間ぐらいで17万人来ています。観光地域の収入が1億7,000万、千円×17万人で入ります。それがこの新たな観光財源を作る糧になっていて。

もう1つ、今年やります。それはイルミナヒストリアっていうヤマザキ マリさんが、支笏湖物語を書いてくれて、それを大きなイベントに、千歳市の市民オーケストラなんかと組んでやるんですけども、函館はそういう素材いっぱいあると思うので、是非とも期待をしたいと思います。以上です。

(陳内フェロー)

ありがとうございます。最後にディスカッションの少し時間取れると思いますので、その時にはぜひ話し足りなかったことをお願いできたらと思います。ありがとうございます。お三方、政策アドバイザーの皆様にお話をいただきました。今日は ISARIBI with さんもいらっしゃっているので、今日の市の皆さんの発表の後、政策アドバイザーの皆さんの発表を受けて、5分程度でまさに思ってたことをぜひお話しただけたらと思います。よろしくお願いたします。

(平松幹浩氏)

ISARIBI with から参りました平松幹浩と申します。現在、北海道大学の水産学部4年生で、出身は愛知県の一宮市というところで18年間過ごして、その後、大学進学で2年札幌行って、今年の春から函館に住んでいるというところですよ。

まず、市長もおっしゃっていた宿泊人口を倍増させたいというところで、実際自分の高校時代の友人なども、自分が函館に住んでいるというのがきっかけで函館に来たいというので何人か来てくれたりしているんですけど、きっかけは自分であれ、やっぱり函館に魅力があるからこそ来たいということで函館に来ていると思うので、それで自分がここで考えるべきことなんですけど、道外から北海道に来たいというときに、北海道の特徴として大きな都市が分散しているという、全部行けたらもちろんいいのですが、どこか1つとなった時に、札幌を選んでしまう傾向があるんじゃないかというところなんです。でも、きっかけが何かあればみんな函館には来たいという考えがあると思うので、そのきっかけというものを増やせたら函館に来る宿泊者、観光客を増やせるんじゃないかなと。実際、自分が今、大学で所属している日本海洋学会というものがあるんですけど、海洋学会、今年30年ぶりぐらいに函館で開かれたのですが、全国各地から来ていた教授の方々や生徒も函館開催をととても喜んでいて、そこが函館に色々詰まっているという証明になっているんじゃないかと思っております。

次なんですけど、今、函館に北大と未来大、教育大、高専、函館大学があると思うんですけど、その人達が実際、就職とかで出て行ってしまおうというのが問題あると思うんですけど、そういう人達が函館に帰ってきたいと考えるきっかけは何だろうって思ったときに、学生時代に函館で体験したイベントとかが大きいのかなと思っていまして、実際、自分の先輩とかも函館マラソンを機会に、函館にもう一回戻ってきてマラソンを楽しんだりとか、今年トライアスロンが行われていたと思うんですけど、トライアスロンをしにきたりとか、そういった学生時代に体験した楽しい思い出をもう一回体験したいというきっかけが函館に帰ってくる理由になると思うので、自分が思い当たる所で言うと、夏だったら港まつりだったりとか、冬だったらクリスマスファンタジーだったりとか、そういったものを季節ごとに増やしていけたら、大学卒業後、たとえ道外に就職してしまったとしても函館に帰ってくるという機会が私たち学生たちにあるんじゃないか感じております。

あと、これも学生目線の話になってしまうんですけど、自分は2年間、1、2年生を札幌で過ごして、昨年からは函館の生活で、札幌でできないような体験をしたいということで函館ならではの学生体験なんだろうと考えたときに、地域との交流というのを自分は考えまして、学生団体 ISARIBI with に所属していて、そういった地域との交流、函館でしかできなかったことみたいな体験ができると函館への愛着が高まり、函館に定住するといった学生も増えるのではないかなというところで、函館ならではの学生活動を支えていただけたら大変嬉しいなと考えております。以上でございます。

(陳内フェロー)

平松さん、ありがとうございます。次世代の若い世代の皆さんに向けて、やっぱり

戻ってきたくなる街のきっかけづくりのお話をいただきました。ありがとうございます。今日ここの会場が50分までということなので、あと12分ほどあります。この後で10分程度、ぜひお互い質問するような時間をとりたいと。私も1分だけ、お話しさせていただけたらと思っております。

函館市フェローの陳内と申します。国の観光政策長官のアドバイザーとか、少し観光の政策に関わったことがあります。他の地域では財源ですね、新しいことをやるにしても、これから人口が減る中で、税金を使ってるだけだとですね、観光財源はブランディングに資する財源がやっぱり中々取れなくなると。一方で世界の観光客数はこれから増え続ける、国際間の観光客数は増え続けて日本でもそういう状況です。大西さんがまさにイノベーターで先に釧路で財源、やはり当時は宿泊入湯税という開発をされてきたということで、観光財源の創出ということの議論が函館でされてるかどうかってわかっていないんですが、日本中の都道府県であるとか、私基礎自治体からその相談を私が今非常に受けることが多くて、是々非々で、賛否両論あると思うんですが、何をやるにも市民の皆さんの財源でブランディングの政策をやっていくだけでは、世界の観光客に対して、函館で世界 No.1 のブランド力で4年以内にトップテンに入るって理想を掲げるときは軍資金がある意味必要なので、観光財源の創出を是々非々で議論するというのを今後の政策に入れていただけたら、さらなる近代化と世界一に向けて都市ブランド、また観光客に憧れの函館であり続けるだろうと思ってひとつだけ意見をさせていただきました。ありがとうございます。

後11分時間があります。どなたでもいいです。言い足りなかったこと、あとは市の皆さん、大西さんもお話し足りないことあったらぜひ。

(大西雅之氏)

1つの例でしかないんですけども、今の財源のことで、函館山っていうのはロープウェイ代ぐらいしかかからないんですか？

(扇谷観光部長)

基本的にはロープウェイも使わずにも登れますので、徒歩ですとか、自家用車は時間的に制限かけておりますので。登山バス、路線バスですね。それからタクシー、こういう選択肢はあります。

(大西雅之氏)

何かこう魅力的なイベントと組み合わせて収入を得ていくようなことは、あれだけの人がこう来るわけですから、考えられないものなんでしょうか？

(扇谷観光部長)

これまでも、例えば入山税みたいなものですか、登山道有料化ですか、そういう議論がなされてまいりました。ただ、函館山は特殊でございます。元々日本軍の施設で、戦前は地図からも外されていた場所、所有は国有地になっております。

国有地の中に北海道の道道が登山道として入っておりまして、市の土地は1つもないんですけれども、市のほうで管理するという形で借りさせていただきまして、山頂店舗施設ですとか、それからロープウェイが、一部、国の財務事務所からお借りしていま運営しているという状況になっております。例えば、道路の有料化となりますと、代替の無料道路を必ず作らなければならないとか、そういうルールがございます。それから先ほど言いましたように、国有地、道道、それに市が絡むという複雑な部分がございます、なかなかそこには踏み切れていないというような現状になっております。

(大西雅之氏)

昔、杜の賑わいというのを函館でやったんですね。全道回ったんですけども。その時には五稜郭で白虎隊の劇をやったんですよ。あれ素晴らしいもんでしたよね。ああいうものを市民参加型で、もう1つ大きなイベントをそちらに作ったら、多分その函館山と両方で人の分散もできるし、収入源にもなっていくだろうし、魅力ができるんだらうと思うんですけど。

(野村修也氏)

野外劇はまだやってるんですよ。今度新しくイタリアかなんかのオペラ関係の人たちが関心を持っているらしいという噂を聞いたことあるんですけど。前にも言ったんですけど、ドイツでハイデルベルク城というのがありますけれども、そこでアルトハイデルベルクっていう野外劇が行われています。王子様が街に行って恋をしてみたいなドラマですけど、それを野外劇でやっていると世界中の人が集まるんです。なぜかという、まさにそのお城でやるからなんですよ。すごいんですよ。舞台ではなくて、作ったものじゃなくて、お城から王子役の人が出てくれば、見るだけでものすごい興奮するわけです。こういったようなものを五稜郭の資産を使ってやるべきだというのは、まだ十分可能性があると思うんですけど。

先ほど、私、熱海の人たちの話を申し上げたんですけど、熱海の成功の秘訣は、熱海に住んでいる人が、熱海の魅力を再発見して、自分で観光に来た人に宣伝をし始めたんですよ。あそこ行ってみたらいいよ、ここ行ってみたらいいよと。それが熱海の魅力を掘り起こすことになったので、住んでいる人が感動してないところの観光地には、誰もリピーター来ないんですけども、そこがまず1つ。

それとあの時にはもう1つあったのは、いわゆるフィルムの関係ですね、サポートをする市の職員の人が出て、普通の交渉では、なかなかその場所をロケ地に使えないようなところを、市役所の人頼むんだからって開いてもらってロケをする。そうすると聖地になって、人が来るっていう。

とにかく好循環を作るために、必死に取り組んでるんですよ。工夫できること。ほっといてブランドが復活することはないので、出来ることを地元の人たちがみんな知恵を出して復活させようという。ですから、まず復活させようというのを皆さん方が頑張ってるだけじゃなくて、市民全体がこの街を復活させようというところに、

何か大きなイベント化していくみたいなものをやらないといけないかなと思っています。

それと、あと一点だけなんですけど、ここで関係人口の話は何回も私がかどいほど申し上げたんですけど、その後、地方創生で、ふるさと住民登録制度というのが打ち出されました。関係人口の話だと思うんですけど。あれは登録しておく、その地域の施設を利用できるといったコンセプトになっていると思うので、そうだとすると、魅力ある施設を作らないと関係人口を構築できないと思うんです。ですから、箱物になってしまうとよくないので、先ほど何回も申し上げたんですけど、例えば、データを取るためにトップアスリートが函館に必ずデータを取りに来ているんですってこれ1回とにか来させると、データは毎年蓄積していくものなので、1回取ったら2回行くんですよ。3回来て毎年。そうしないと自分が良くなっているか悪くなっているか分かりませんので、バラバラに行くことはないので拠点にしてしまうと。例えば、「日本に来てる時、大谷選手は函館のデータセンターでデータを取ってるらしいよ」だけで、もうこれで大成功なわけです。こういうような魅力ある施設を誘致できるかどうかというのは検討材料だと、私はもう強く思いますので、ぜひ検討してもらえればと。くどくなって申し訳ありません。

(陳内フェロー)

ありがとうございます。後4分あります。市の側からも何かご質問もぜひ良かったらですし。丸谷さんもし良かったらさらなるご意見、ぜひ。

(丸谷智保氏)

財源の問題、大きい問題だと思います。ただ、函館はまずどうして魅力度ナンバーワン9回連続とかね、そういうのが取れるんだらうということ突き詰めてほしいと思うんです。なんとなく良いんですよ。あらゆるものが。けど、何がいいんだらうと。その中で一つ思うのは、手の届くおいしいものがある、サンセバスチャンみたいにくちやくちやく高くて、イカソーメンがすぐ食べられるとか。本当は違うんですよ、本当は違うんだけど、北海道のすべての海産物がそこに揃ってるみたいなイメージがあるんですよ。それからラッキーピエロがあったりハセガワストアがあったり、そういうB級もあって、しかも美味しそうだと。これってすごい魅力だと思うんです。こういうのは特に財源なく函館が今持っている、少し過剰気味に持っている、いい財産ですから。それを使ってやっぱり観光客を呼び込んで、宿泊税でもなんでも、1,000万人泊が来れば20億になると、200円でも20億だから。そうやって、回していく中の財源でだんだん大きくしていくのと、さらにその発信をすることによって、世界から民間投資を呼び込むということもあると思うので、まずはやっぱり今、魅力度No.1を突き詰めていって、その中でも財源となる、つまりさっき僕言ったようなサブ財源が出てくるんですよ、人が回ればどうかですね。そういうものも自信を持ってやればいいと思うんです。

僕、1,000万人泊って市長に申し上げたんですけども、それはオーバーツーリズム

ムもあるしって心配していましたが、逆にそこで出てくる財源をオーバーツーリズムに充てるといふに言ってしまうなさいと。そうすれば市民も納得すると。まさに野村さんもおっしゃったように、市民全体を巻き込んだ、ジェネレートが必要なんですね。お金を回すようなことが必要なのです。そのコンテンツも含めて十分函館は持っている。そこで大なり小なりお金を作って、更に魅力を高めていくというのが、非常に僕良い方法かなと思うんです。だから 2030 年に向けて、観光財源はこれだけまず函館の中だけで作れるぞみたいなビジョンをぜひ持っていただきたいと思って。自信を持って大げさに予算を観光部長も含めて持っていただきたいなというふうに思います。十分魅力はあるんだろうと思います。

(野村修也氏)

やきとり弁当は私のソウルフードですよ。ラッキーピエロなかったですから、子どもの頃。

(大西雅之氏)

先ほどグレーター函館の話をしましたけれども、そのグレーター函館を網羅して訪ねて歩けるような観光型 MaaS というのはできているのでしょうか？

(扇谷観光部長)

まだできてないですね。アナログ MaaS 的なものは、新函館北斗駅を中心としたエリアで、地域のバス会社とかと JR さんとかが連携してというのはやってるんですけども、いわゆる MaaS というところまではできていないです。

(大西雅之氏)

オホーツクなんかでも今社会実験でやられたりしてますけど、道南ってまとまっているんですね。コンパクトという表現がいいかどうか分かりませんが、様々な要素がまとまっているから、これをしっかりと観光型 MaaS で結んで、そこにきちっとしたコンテンツを組み上げていったら、もっとこの函館圏が魅力的になるんじゃないかと思います。

(野村修也氏)

あと一点、さっき平松さんがおっしゃってたんですけど、函館マラソンは結構可能性があって。私は陸上部の部長ですけども、うちの監督は必ずうちの陸上部の長距離、箱根の選手のちょっと手前ぐらいの選手を函館マラソンに出すんです。何で出すのかって聞いたら、私に気遣ってるのかって聞いたらですね、そうじゃなくて、その監督は世界陸上で日の丸を背負っていた日本代表なんですけども、自分が競技やっていたときの 1 つの思い出として、函館でいい記録が出たというのが、とにかく自分の人生を変えたので、だから学生を送るんだと。こういうことってすごく大事で、やっぱり行くきっかけを作るっていう点では、イベントとかうまく活用すればいけると思います。

同窓会とかでもいいんですよね。何年に函館の中学校を卒業した人、とりあえず集まってみませんか？と区切って人を集めてみるみたいなことも、どんどんやれば、思い出を訪ねてくる人がたくさんいると思いますので。

(陳内フェロー)

きっかけづくりですね。ありがとうございます。本当に限られた時間なんですけど、多様な意見交換ができたかなと思います。私、今日はまとめる係じゃないんですけど、録音をされているということで、これ、しっかり市の政策に活かしていただけたらというふうに思います。本当にありがとうございました。この後、また最初の場所に移動して、市長の挨拶ということなので、本当にありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。